

港北区災害ボランティア連絡会ニュース

事務局 〒222-0032 横浜市港北区大豆戸 13-1 吉田ビル 206 港北区社会福祉協議会

TEL 045-547-2324 FAX045-531-9561 mail info@kouhoku-saibora.net

HP <http://www.kouhoku-saibora.net> FB 港北区災害ボランティア連絡会

第55号

2017年6月



*入会は随時受け付けています。あなたの町の防災度を高めるためにお力を貸してください

今年度方針決まる「つながりは、そなえ」をつくろう

- 1 会員がつながり、楽しく学ぶ災ボラ、役にたつ災ボラ
- 2 地域とつながり、命を守る知恵を出す災ボラ
- 3 被災地とつながり、汗をかいて動く災ボラ

この3本を活動の柱にした今年度活動方針は、振り返りをもとに、昨年できた部分はより大きく、きなかった部分は着実に実行していこうとの意味があります。太尾防犯拠点センター訓練、常総市支援、物販活動等の取り組みを通して具体的な活動を発展させましょう。

防災を自分ごとにするために

これを事業方針のトップに掲げたように、なかなか進まない災害対策をまずは会員の家庭から進めていきましょう。自分の家を防災のモデルハウスとして近隣の人々に伝える努力も大切です。「死なない、傷つかない備え」をすることで初めて、避難所に頼らないで済む、災害ボランティアとして活動できる事ができます。そのためにも連載中の「我が家の防災対策」の内容が問われてきます。

学習会「最後の1人まで」

災害時のボランティアの動きが分かった、 分かりやすかった、との声

総会終了後の学習会では、記録から学ぶ災害ボランティアの動きとして、神戸の被災地NGO協働センターが常総市水害時にどのように関わり活動したかの記録映像を見ました。

振り返りでも指摘されたように、多くの会員が災害時のボランティア活動を具体的にイメージできないことから計画された企画です。

活動を通じておなじみとなったJUNTOSの横田さんや森下町の染谷さんも登場する場面もあり、災害現場経験のない会員にとっても分かりやすい



映像を見てボランティアの動き方を確認

内容だったようです。

災害ボランティアは現場をしっかりと確認すること、現地の関係者ときちんと協議をして活動を開始すること、災害時には全国から経験あるボランティア団体が参集すること、行政も初めての経験と人出不足のため大変なこと、だからこそ関係者が一堂に集まり、被災者の問題解決のための知恵を出し合う場作りが必要なこと、などを学ぶ事が出来たと思います。

残念ながら今年もどこかで災害が起きるでしょう。その時には港北区災害ボランティア連絡会として最大限できることを追求していきたいと思えます。そこからの学びが港北区での災害対応に活かせると思えます。

この映像はCDにしています。ご希望の方は事務局までご連絡下さい。

今年もやります。歓送迎会

日時：7月5日19時～

会場：大倉山駅周辺（未定）

良い会場をご紹介ください。

「どう作る？どう準備する？ HP・FB、そしてマスコミ発表は？」

Dブロックの会議で、災害時にどのような情報発信が望ましいのか、合わせてそのためには平常時からどんな準備をしておけば良いのかが話題になりました。そこで各地の災害ボランティアセンターでIT支援をしている神奈川災害ボランティアネットワークの上村さんをお招きして研修会を行いました。

災害時には数多くの情報を発信しなければいけません。ホームページ、Facebook、Twitterなどのそれぞれの特性を生かした発信の仕方や、プレスリリースも含め外部に流すかどうかの判断基準など、実践的なワークショップで大変好評でした。

以下参加された方からの感想です。

(なお当日の参考資料「災害ボランティアセンターにおける広報ガイドライン」は当連絡会ホームページに載せてあります)

出された課題を整理してみる



D ブロック研修会に参加して

港北区災害ボランティア連絡会 小澤美津子

震災時に災ボラセンターから発信する内容をHPとFB、どちらに載せるのが良いのか、実践形式で判断することが大変難しかったです。たぶん被害が大きければ大きいほど混乱します。またボランティアからの問い合わせも増えることが予想されますが、先手を打ってよくある質問をHPから発信すればその部分の対応が整理されます。また基本情報もHPに載せられれば参加者も心丈夫ですね。日々変わりゆく状況やその時折の地域情報はFBを使う事が有効とのこと。

港北区災害ボランティア連絡会ではHPは立ち上がっています。FBも準備が進んでいます。区社協とは十分な関係が築けていると思います。あとは

区や市県、市ボラなどと情報発信についての事前確認を今一度行う必要があると思います。

情報の強い力確認

港北区社会福祉協議会 藤原洋輔

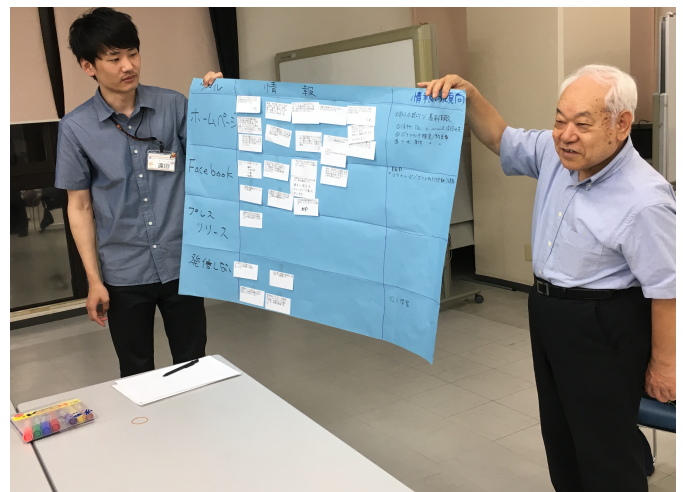
SNS 等インターネット社会の発達もあり、情報が溢れかえる昨今、便利になった反面その取得方法が多岐にわたるため、手段が各自に委ねられるというところでは、どうすれば正しい情報を手に入れられるかの選別が非常に難しくなっていると感じます。

勿論それは発信者側にも十分な配慮が必要というところで、どのような手段を用いれば誤解を与えず、かつ効果的に行えるかということを考える必要があります。

研修の中では、災害ボランティア連絡会で災害時に情報を発信する際、内容に応じて HP、FACEBOOK、プレスリリースのいずれかを選択するか、もしくは発信をしないほうが良いかを考えるワークショップを行いました。その情報を目にする人はどのような人なのか・・・意図せずして目にしたのか、色々と調べた上で行き着いたのか。相手の立場で考えると見え方が変わってきます。また、救援物資急募の情報の扱いで、良かれと思い情報を拡散させようと SNS で用いたとして、被災地に大量の物資が送りつけられてしまうことも想定しなければならない、といった様々なケースを考えることができました。

非常時こそ、情報には非常に強い影響力があることを自覚して取り組んでいく必要があることを改めて考えるきっかけとなりました。

ワークショップの結果を発表



広報担当の役割を認識した

青葉区災害ボランティア連絡会 小池由美

講師は、上村貴広さん。現在、情報支援レスキュー隊 (IT DART) の一員として熊本地震後の西原村社協の支援を継続中。まさに現場で起こっているさまざまな課題を想起させる示唆に富んだ講座内容でした。お話ばかりでなく、ワークショップを交えた今回の研修は、多くの会員に参加してもらいたかったと思います。

なかでも「ボランティアセンター (以下 VC) には広報担当が必要である。これが無くては、VC の活動は半減する。」これには考えさせられました。これまでの VC 立ち上げシミュレーションでは、やってくるボランティアをどのように派遣するかということにばかりに注力していました。ボランティアコーディネートをうまくやるには VC 運営そのものがしっかりしていなくては成り立たない、そんな基本的なことに気づかされました。

広報担当というのは入ってくる情報と出す情報をコントロールする。さらには、情報を収集し、情報を伝達する。こういった技術は災害が起こってからではとても間に合いません。日頃の一人ひとりの活動に組み込み、発災時に対応できる仕組みづくりと人材づくりが欠かせないことが分かりました。

講座のための資料として「災害ボランティアセンターにおける広報ガイドライン」を事前にいただいていた。その中に VC が平時からできることとして次の7項目挙げられています。みなさんの VC ではどの程度できているか点検してみませんか？

例えば、すぐできるは○、準備を始める、始めたいは△、現状ではムリは×として考えてみました。青葉区では

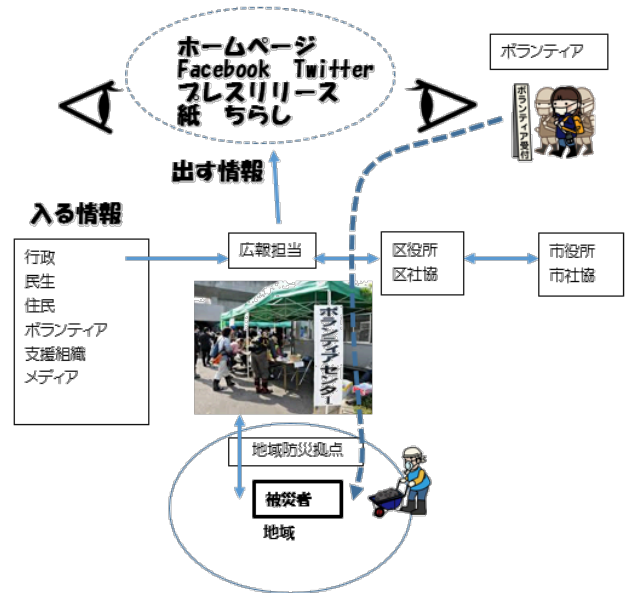
1. マニュアルへ「広報担当」を位置づける：△
2. 情報発信の責任の流れを決めておく：×
3. 各種広報ツールに触れておく：○
4. 広報ツールやハードの準備をしておく：△
5. 地元メディアと情報共有をする：△
6. VC の基本情報をアーカイブしておく、資料を事前に作成する：○
7. 文章を書けるようにしておく：△
8. 広報ができる人を探しておく：△

と、整理したところで、できるところから動き出さねばなりません。やるしかないですね。近隣区

同士の情報共有もさらに密にし、研修が活かされる VC を立ち上げられるよう今後も努力したいと思います。

ボランティアセンターでの情報の動き方

矢印=情報の流れ 破線=コーディネートの流れ



JVOAD フォーラム

「多様な担い手が集う場」

JVOAD (全国災害ボランティア支援団体ネットワーク) 主催で、昨年「つながりは、そなえ」に続き、全国の災害支援に関わるボランティアが集うフォーラムが開かれました。今年は昨年を上回る500名以上の参加者で活発な討論がされました。災害ボランティア活動を論議する場に、民間だけでなく、内閣府、経済界、労働界からも参加する場を作れるのが JVOAD の意義でもあるでしょう。

かながわ311ネットワークの伊藤さんからの感想です。

神奈川でも作りたい繋がり

分科会、フォーラムを通じて、昨年の2大災害、熊本地震と岩手県岩泉町の台風水害を題材に繰り広げられる議論は、問題点を指摘し、課題を抽出する、ぴりっと締まった構成でした。

私は分科会2「災害時に機能する都道府県域の支援ネットワーク作り」と、分科会8「災害時における支援に必要な情報の集約」の二つに参加しました。

分科会8は今私がかつとも興味関心のあるテー

マです。国際NGOや中間支援団体の体験や手法を伺った後、IT-DARTとJVOADが開発中の、団体活動の共有見える化ツールの使い勝手を試しました。災害時に情報が重要なのは自明ですが、限られたリソースで、どんな情報をどう収集し共有していくかは難しい問題です。神奈川でも災害の当事者になる日にそなえて、ぜひ繋がり作りを進めたいと思います。

私たちかながわ311ネットワークでは、熊本地震では一年に渡り宇城市役所や社協の支援を、台風10号水害では岩泉、久慈市の災害ボランティアセンターの支援を行いました。やってきたことをもっと大きな枠組みの中で見直せたことは今後の活動を考える上で大きな指針となりました。熊本では、情報共有の場として火の国会議が開催され、今も続いています。このような場を平時から整えていくことが、今災害に備える上で必要なことではないかと思っています。

今回の会場は、関東大震災で3万8千人の死者が出た、陸軍本所被服廠跡地に建っていることを当日知りました。そのような場所で熱い議論が交わされた二日間を今改めて振り返っています。来年は6月12日、13日に同じ会場で開催されます。次回も参加するつもりです。

認定NPO法人かながわ311ネットワーク
伊藤朋子



研究者、行政、経済界、災害ボランティアが並んだ
シンポジウム 5月27日

この数字なんだ

$53404 \text{名} \div 28 \text{箇所} = 1907 \text{名}$

元禄型地震で起きる港北区内の想定避難者数を指定避難所数で割った一避難所の避難者数です。実際にはこれ以上の避難者が押し掛けることが予想されます。どうしましょう。

よろしくおねがいします

4月から港北区役所総務課防災担当となりました葛川翼です。配属されたばかりで、今は勉強の毎日です。

私は、東日本大震災発災後に募金活動をボランティアとして行いました。その時感じたことは、ボランティア活動の認知度が低いことや被災地域のボランティアの受け入れ体制が不十分であったことでした。

課題解決に向けて、災害時のボランティア活動について啓発を図っていくことが重要であるとともに、災害発生に備えての知識や訓練を通じ、ボランティアセンターと自治会や町内会、地域防災拠点での連携を強化していくことが必要です。

具体的には、平常時は訓練や広報により減災行動を啓発し、災害発災時には的確に情報伝達を行っていきたいです。そして、被災された方に少しでも暮らしやすいようにストレスを軽減させ、物品や食料が届くように勉強していきます。どうぞよろしくお願いいたします。

死なない、ケガしない、避難しない

我が家の備えどれだけできて いますか？

我が家の防災対策を徹底する大切さ

この三つが実現していれば地震災害での被害は大きく軽減できる筈です。しかしなかなか改善されないのが実態です。災害ボランティアは災害時に活動することを考えなければなりません。まず隗より始めよ、です。何よりも大事な人を死なせてはならない、傷つけてはならない、を徹底することが一番大事で、連載中の我が家の防災対策はそれを伝える大切なコラムです。

防災グッズは揃えたが家が壊れて使えなかった、なんて事になりはしませんか。まずは大事な家族を守る備えを徹底することを港北区災害ボランティア連絡会の会員が実行することをこの一年で行いましょう。「愛する家族を守るボランティア」を合い言葉に！

